遊ぶ会

河原版（かわら）

《野川を生命（いのち）あふれる川に》

調布と上野村と

本木伸太郎

第3号
1992.1 発行

代表・編集
野川で遊ぶ
まちづくりの会

依田Tel 0424(80)8861
尾辻 03(5384)5539
内藤 0424(89)9351

私は、武蔵野で生まれ育った。子供時代から四十年程が、経過している。ここ三年程野川や周辺の自然を見直してみる気になった。結果は、人口集中と開発などによる絶望的な自然破壊を再認識させられる事になった。水はまだ汚い。野川の形も変わった。植物や昆虫、魚などは激減。子供たちと自然との触れ合いの場もほとんどなくなったままだ。これらが子育てにも望ましくないのは明らかだ。すべてが遅すきたのだ、というのが実感であった。何度も脱力感におそわれた。

しかしやがてかつてのふる里に対する渇望の思いがわきあがって来た。都市部から逃げ出そう。まだどこかにふる里と呼べる理想的な所があるに違いない。こんな時に群馬県の上野村という、人口千八百人程の村があるのを知った。下久保ダムの西神流川の最上流に位置し、面積は調布の10倍はある。直ちに村に走った。なんとそこには濃厚な里山の風景が残っていた。水は、期待に違わず驚くほどきれいだ。蝶が乱れ飛んでいる。魚影も濃い。家々の外壁にはきちんと薪が積み上げられている。夕暮れ時には、山あいの川沿いに身を寄せ合うように建ち並ぶ村の家並みのところどころから、風呂が炊事用であろうか、うすい紫色の煙がたち昇り、次第に周囲の山裾に溶け込んでいく。見上げると数羽の鳥が頂き近くを旋回している。あまりの懐かしさにしばらくその場に釘づけになったものだ。

昨年は調布の友人たちとこれぞという人を、村に連れ込むことになった。当初の感激は裏切られず足を運ぶ度に新しい発見があり、喚声が上がった。しかし村長や村人たちとの接触が重なるにつれ、見えなかった問題がいくつも判ってきたのである。澄んで魚がいっぱいの川は村をあげての水の浄化努力の賜物であったし、里山の美しい景観は人手不足で崩壊寸前。過疎化は子供の教育を至難にしており、家族ぐるみの村からの脱出現象をひき起こしている。調布周辺の自然を見る目も変わった。上野村は林業が主体だ。村人はどの木を切るか一目で即断する。切り方で森は生きも、死にもする。一目で荒れていると判る佐須付近の林をみて貰いたい。手不足で荒れるのを止められない上野村の山を救えないだろうか。やりたいことが山ほど見えてきた今日この頃である。

第3回野川ネットワーク報告

野川で遊ぶ街づくりの会の代表
尾辻　義和

昨年12月1日、狛江の西河原公民館において開催された「第3回野川ネットワーク」について報告致します。当日は野川流域各所より15名が参加され、各地の現状が報告されました。世田谷からは特になし、狛江からはわきみず祭りが無事開催されたこと、西野川の公園整備現場で伏流水と思われる水が出ていたこと、調布からは野川下水処理場について新たな進展がないこと、いこいの水辺の2期工事が始まったこと、小金井からは12月22日に開催されるわんぱく冬祭り（鍔山氏の写真集出版祝いをかねて）の案内がされました。

この日の主な議題は「関東村跡地野川下水処理場」についてでした。

いくつかの意見が述べられましたので、簡単にまとめてみます。

1. 調布飛行場との関連で、正規の飛行場となった場合の影響についての懸念、それ自体が京王線高架などの問題とからめて、政治とりひきの材料になっている。
2. 私たちの使用している上下水道について、東京都が生産緑地法などにより人口増加を前提にしていることに問題があるのではないか。
3. 下水処理場の処理量について52万トン/日量は多すぎるけれどでは少なければいいのか。4. 下水処理の基本として、地形的に流域を越えないようにするべきで、できなければ自区内処理を原則にしてはどうか。
5. 関連する汚泥処理施設について、調布市の要望をいれているがそれは、処理場の施設を調布市がすでに認めていることになるのではないか。

この後、小豆畑氏より現状の報告がされました。その要旨は、

1. 調布飛行場が決着すれば、3年前に環境アセスメントを終了しているので、いつでも着工できる状態である。
2. 52万トンの下水が野川下水処理場1カ所で処理されるといろいろな問題が吹き出してくる。
3. BODが8mg/1の処理水が今の野川に放流されれば明らかに水質が悪化する。玉川上水でも明らかなように悪臭やリン、窒素は除去されていない。
4. いこいの水辺は水没するか、なくなってしまうだろう。
5. 東京都の内部でもいろいろな担当部署内での調整がされていない。
6. 汚泥処理施設は430t/日の汚泥を燃やして処理する計画である。

最後に、今後の対応について以下のような意見がありました。

1. わかりやすい野川下水処理場問題のパンフレットを作ってはどうか。
2. この問題に関するシンポジウム等を開催するために実行委員会を結成する。
3. 52万トンの処理水の流れる野川をイラストなどで視覚に訴えるものを作成する。

2の意見を受けて、シンポジウム等の開催のための企画会議の実施が決定されました。

また次回の「野川ネットワーク」を調布で、1992年2月2日（日）に開催することを決めて、閉会しました。

調布周辺の　**チョウとトンボの写真展**

1／28～2／9　西部公民館で開催

主催：野川で　遊ぶまちづくりの会
共催：西多摩昆虫同好会　　後援：調布市教育委員会

【成功した東京ホタル会議】

都議会議員・野川ホタル村
前田　ゆみこ

絶滅したホタルの再生に取り組む人、残された自生地を守ろうと努力を続けている人、ホタルの研究家など約120人が昨年の12月1日、小金井市の福祉会館に集まり、「第1回東京ホタル会議を開きました。

発起人は、「野川ほたる村」(小西正泰村長)のメンバー。豊な自然環境の象徴であり、「平安時代から今日まで浮世絵や文学などに登場し、これほど人間と深くかかわっているものはない」。(小西村長のあいさつ)ホタルの状況を通して、私たちの「自然を見直そう」というこの会議、呼びかけ人を快く引き受けて下さったのは、矢島稔さんをはじめ、13人のホタルに関する第1人者の人々でした。

この日の会議の盛り上がりは、「どうして今までこのような会がもたれなかったのか不思議」と、終了後の感想を持って会場を後にする参加者もいたほどでした。

会議では11人が、各地の状況、取り組みを報告しました。「蛭の発生でホタルの餌のカワニナに被害がでる」「都の護岸工事のためにホタルが全滅してしまった」等など。そこでは現在の都市づくりや開発の問題点が指摘され、自生地の破壊が進んでいる、深刻な現状も浮き彫りにされました。

東京ホタル会議は継続していくことが確認され、次期開催を八王子と五日市の方々が引き受けました。

とくに五日市では、都や関係市を中心とした秋留台開発構想のもとで、同・横沢入にJRが高級住宅の造成を計画しています。このままでは、この地域に残る弥生時代から受け継がれてきたとされる貴重な田圃が破壊され、ホタルをはじめ自然の生態系の中で生きる多くの生物が絶滅の危機にあります。

今回のホタル会議をきっかけとしてこうした開発により、姿を消そうとしている自生地をみんなの力で守り続けて行きたいものです。

調布・北部公民館 での催し
～「食」の環境講座 ～

－多数のご参加を！－

調布市柴崎　0424-88-2698

（木曜日・ＰＭ２：００～，９回連続）

①⑥	１／３０	３／５	「都市」と「食」のエコロジー	（明峰　哲夫氏）
②③	２／６，１３		私たちをとりまく食環境	（三宅　征子氏）
④	２／２０		調布市のゴミ回収事情	（清掃事務所の職員の方）
⑤⑦⑧	２／２７	３／12・19	食環境の変化と短命化	（西山　隆造氏）
⑨	３／２６		都市化と自然環境	（小川　潔氏）

※明峰先生は日野で『やぼ耕作団』を主催し精力的に活動されています。
また、小川先生は学芸大で地球環境科学を教えていらっしゃいます。
お二人とも、遊ぶ会の紹介から講師を引き受けて下さいました。

この真冬の寒いときにトンボの話なんて、少し季節はずれのようですが、冷たい水の中でじっと春を待っているトンボの卵やヤゴ達のことを忘れることはできません。

トンボの住みやすい環境といったとき、単に成虫が飛びまわる場所だけではなく、幼虫（ヤゴ）も安心して生活できる場所のことだと僕は考えています。

どんなに小さな水たまりでも、成虫は必ずといっていいほどそこを訪れます。オスなら縄張りを作り、メスなら産卵↘

トンボと環境（Ⅲ）　～トンボの集まる池～

上村　佳孝（中3）

↘をするといった目的があるので、トンボは水があれば寄って来るのです。

秋の長雨の後、昨日までの雨でできた水たまりにアキアカネを見かけることがよくあります。せっかく飛来して産卵しても、こういった水たまりは翌日には干上がり、卵はふ化することができません。

これは、成虫がいても幼虫の住めない環境の一例です。幼虫の生活できる環境は、必要な時期（羽化までの期間）に、必要なだけの水量があることが最低限の条件です。

次に必要なものはエサです。成長に↗合わせて、いろいろなエサを取るようになります。すべてのトンボは生れたときから肉食性でもあります。

また、トンボの成虫が産卵したり、ヤゴが隠れ場所とする水草があることも大切な条件です。

水量、水質、エサ、水草といった条件をすべて備えている池が、トンボの集まりやすい環境であるといえます。もとろん種類によっては、流れのあるなし、水の深さ、水草の種類などに好みは違ってきます。

また、池といっても、川が蛇行して水がよどんだところや、水が湧き出して湿地になっているところも含まれます。

以上のような条件をそろえた水辺が、私たちのまちの中にどれだけあるか‥？これは、自分たちが住む町の自然の豊かさをあらわす指標になるのではないか、と僕は思っています。　（狛江在住）

ヨシノボリ

「ぼくが最初にヨシノボリという名前を聞いたとき、お相撲さんの名前かと思いました。ところが、見るとヘンな顔した、おもしろい魚です。…」

これは、当時、小学５年生だった少年が初めてヨシノボリを見たときの感想です。この少年はすっかりヨシノボリのとりこになり、１つがいのヨシノボリを観察しては、その稚魚を育てようと試みていました。次の年の秋になって、朝日学生新聞社の『海とさかなコンクール』で見事、入賞しましたから、その執念もめでたく報われたわけです。

今でこそ本当のお相撲さんで芳昇（よしのぼり）というシコ名の人がいますが、確かに名前だけ聞くとヘンな名前です。実はこの魚、体長５～７cmの川にすむ淡水のハゼなのです。今でも、多摩川では是政や京王多摩川の河原寄りの流れのないところには、石と石の間をチョコマカと這っている姿を見ることができます。胸ヒレがおわんを伏せたようにすぼまっていて、それが吸盤の役割をすることによってヨシ（アシ）の茎（くき）でものぼってしまうことからついた名前だといわれています。（トビハゼのように水上には出ません。）実際に水槽などで飼ってみると、ガラス面にぴったりとはりつくことが分かります。

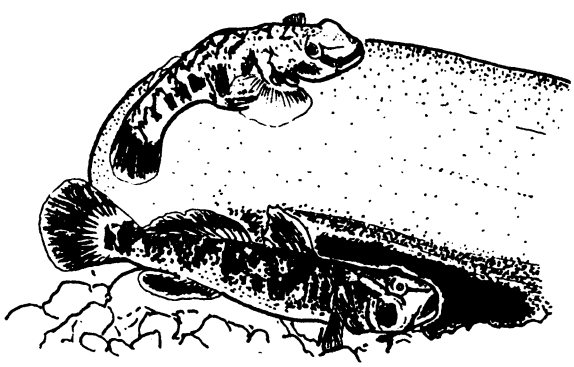
ハゼの仲間ですから、生れたばかりの糸くずのような稚魚は餌の豊富な河口や下流に流されます。夏になって１～２cmに育つと、中流のほうまでさかのぼって来るわけです。ダムのない岐阜県・長良川では、７０kmものぼってくるものがいることが知られています。琵琶湖周辺の川では、夏になると護岸のコンクリートにびっしりと幼魚がはり付く姿が見られます。それを採って『ウロリの佃煮』として売っているわけですが、これだけは食べることができませんでした。垂直のコンクリートでも、水さえ流れていれば上っていきます。吸盤状の胸ヒレは、彼らにとって大切な道具なのです。

ヨシノボリは、比較的かんたんに飼うことができます。こぶし大の石を砂利の上に置き、すみかにしてやります。餌は肉食性が強いのですが、金魚の餌もよく食べます。オスは石の下にナワバリをつくり、毎日がとにかく忙しい。巣をなおしたり、ジャマ者を追っ払ったり…私たちの生活を見るようです。やがてオスは全体が黒ずみ、メスを迎入れ産卵をさせます。小さなメスが１年に１４回、１万２０００もの卵を産んだのには驚かされました。（冒頭の少年の観察）

女性がヨシノボリを見て、グロテスクだと言うか、ユーモラスだと言うかで相性判断もできます。

３年前、野川でも多く戻ってきて、大変喜んだのですが、翌年の夏に川が涸れてしまい、また見られなくなりました。今年こそは、あのユーモラスでたくましい姿を見せてほしいと心から願っています。（N）

ヨシノボリの産卵



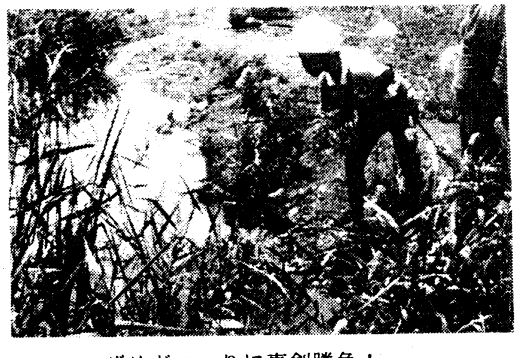
工場跡地、その後は…

下町みどりの仲間たち　野村　圭佑

商店や工場、住宅がたちならぶ曲がりくねった道を抜けると、突然、空が広がり、大きな原っぱに出ます。初冬の空にはモズの鋭い声が響き、ヨシの枯れた茂みにはオオジュリンがヨシの茎を割っています。もう木枯しが吹こうというのに、子どもたちの声は絶えません。ここはどこだと思いますか？そうです、調布の皆さんも訪ねてくれた、デンカ跡地です。

東京の中でも緑の一番少ないといわれている荒川区で、私たちが「デンカ跡地」工場跡地の原っぱを見つけてから、私たちは、ここを子どもたちが自然にとけこめる遊びができる公園として残すことができないものかと考えました。そこで、多くの人々にこの自然がどんな様子なのか、どんなに素晴らしいかを知らせてきました。また、この跡地の観察を続けていくうちに、ここに戻った生き物たちは、どこからどのようにやって来たかなど次々と疑問が出てきました。幸いにも、こうしたことを専門に研究されている方々にいろいろ教えていただく機会にめぐりあいました。東京都は、ここに運動公園を建設しようと予定していたのですが、こうした私たちの考えを取り入れて、現在のこの自然を生かした公園づくりをすることを約束してくださいました。

私たちは、下町といわれる荒川区の近くで、ほかにもいろいろと楽しいところを探したり、観察を続けています。東京の下町には、まったく自然などないと考えられがちですが、ちょっと注意してみると、この原っぱだけではなく、思いがけない自然や、それまで見過ごしてきた古い歴史があったりすることに気がつくことが少なくありません。それは、下町にもともと自然がなかったのではなく、かつての豊かな自然の多くが今でも失われているのだということを教えてくれているのにほかならないのです。



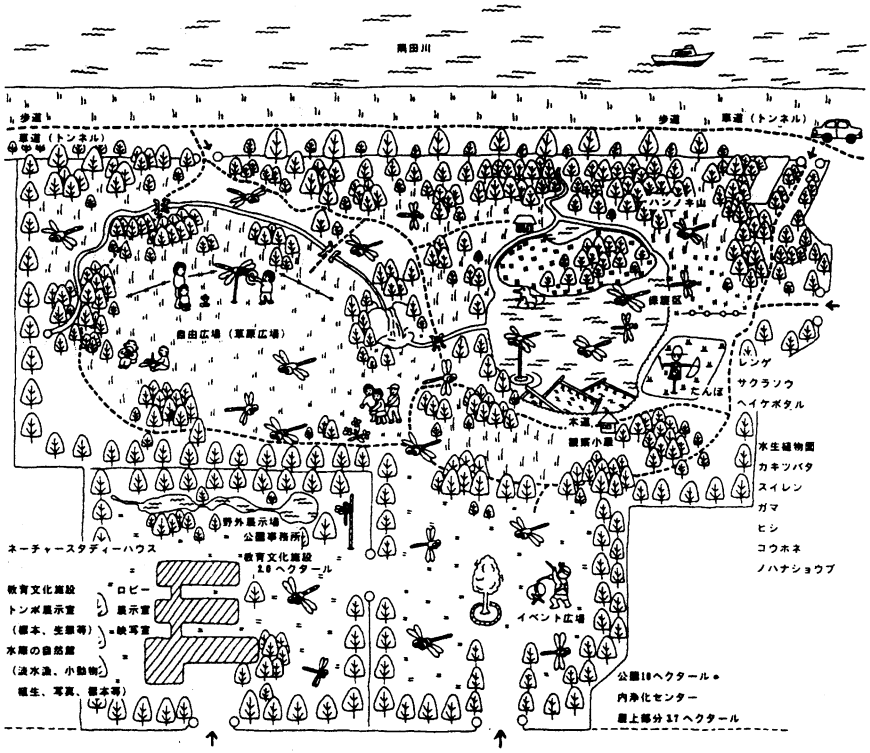
ザリガニつりに真剣勝負！

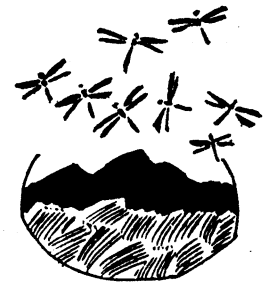
私たちの経験や観察は、きわめて限られたもので、不完全なものかもしれません。しかし、この跡地以外にも、一度自然が失われたり、少なくなってしまったところにも自然を取り戻すにはどうしたらよいのかを考える手がかりになるのではないでしょうか。この跡地での観察を中心に、NHKの地球ファミリー『工場跡地に生き物たちがあふれる　～東京・荒川区～』という番組が制作されました。（平成三年十月二十五日放映…編集部注）

荒川区に比べ自然の豊かな調布にあっては、その土地にあった方法で自然を保ち、より豊かにするようにがんばってほしいと思います。自分たちの身のまわりのことからよく注意してみると、いろいろ見えてくるはずです。そして、お互いに情報を交換し、共に豊かな環境を取り戻していきましょう。

東京都環境保全審議委員もなさっている野村さんは、調布の写真展の際、質問コーナーの回答者としてかけつけてくださいました。皆さんも、公園整備される前のトンボ池を見学にいってみませんか？驚きますよ、きっと。（編集部）

トンボ公園（自然体験園）案

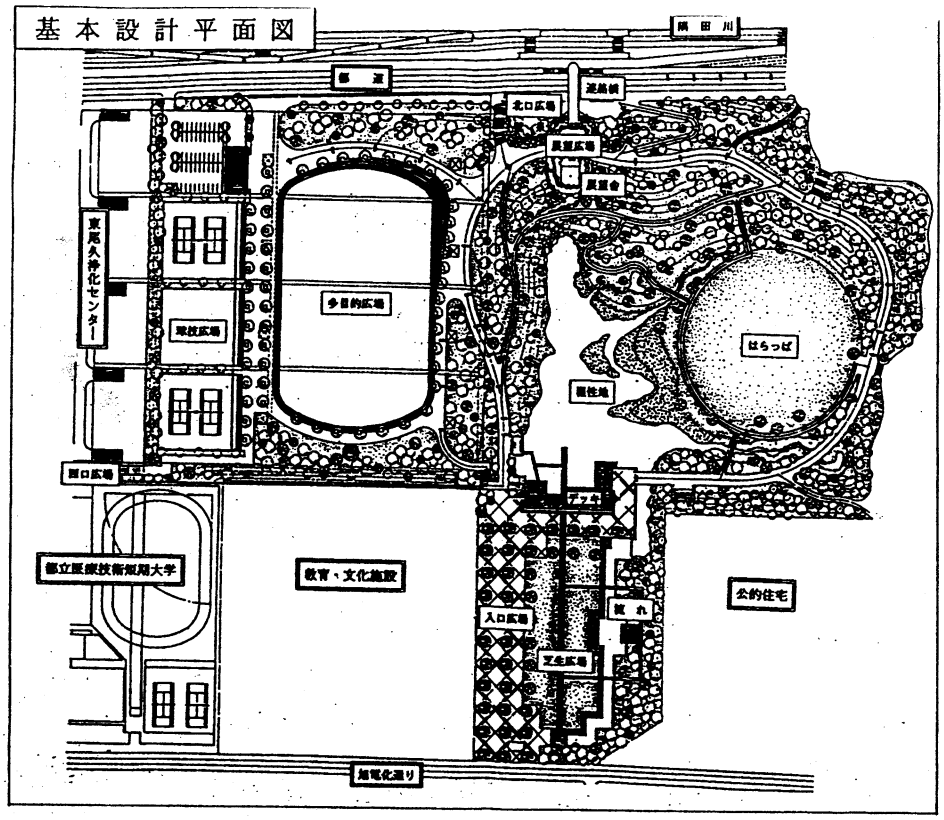




←下町みどりの仲間たちの
野村さんたちのプラン

東京都の修整計画 ➡
上の図と比べて違いを
考えてみてください。

資料：東京都、尾久の原公園
基本計画より



中間報告

調布周辺のチョウとトンボの「写真展騒動記」

依田　輝男

「まあきれい」「調布にこんなにいっぱいチョウやトンボがいるの」というのが展覧会場に来て下さった人達の最も多かった反応でした。そして比較的恵まれた調布の現在の環境をこのまま残してゆきたいと多くの人達が語ってくれました。

そもそもこの企画の発端は去年の夏の終わり頃調布域で最も自然の残っている都立農業高校農場から自然広場、その下のたんぼから野川にかけてトンボを好き少年の中学生上村佳孝君とトンボの種類を調べてみようということになりました。しらべてみるといっても私は全くの素人で当日は上村君が先生で私はその不肖の弟子といった態でしたが、その時見せられたのが調布周辺で撮った二十種類のトンボのアルバムで、その他にも十種類程見ているという。そこでヒラメイたのが写真展のことでした。

調布周辺にはまだこんなに多くのトンボが生息しているこのことを多くの人に知ってもらいたい。そして身近な自然の大切さを再認識してもらいたい。この発想は数年前から荒川でトンボ公園（自然体験園）作りの中心になってこられた野村圭祐さんにお会いしたときの話に触発されたものです。

丁度その頃新聞で西多摩昆虫同好会が「東京都の蝶」という写真集が出版された記事を読み（同会の十年にわたる活動の集大成ともいえる労作です）。調布周辺のチョウも併せて展示できないだろうかという思いに駆られたのでした

代表の久保田さんは一面識もないものからの願いを承諾してくださり、以前からときどき講演会に参加していた「横浜かわを考える会」の森清和さんを通して環境計画アトリエの山道省三さんのアドバイスも受け、一カ月位の間に「調布周辺のチョウとトンボの写真展」開催が決定したのでした。

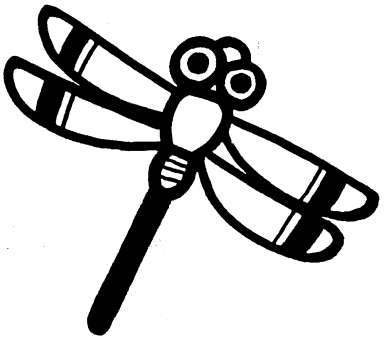
かくして泥縄式かつ、おんぶにだっこ方式による写真展を最も無知識の人間が企画するという無謀な計画がスタートを切ったのでした。

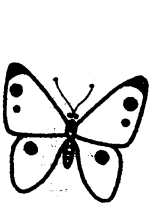
その後野村さんの紹介で高知県中村のトンボ王国も貴重な写真を提供して下さることになり、トンボの写真三十五枚、チョウが大小併せて六十枚以上、計百枚という大規模なものとなり、さらに写真家の浜野栄次さんと鍔山英次さんが賛助出品により花を添えて下さることになりました。さてその後は大変でした。思いつきと無計画の重なりでふくれ上がったプランを実行する為に精力をそそいでいる会員の人達の側で私はといえば、ただおろおろしているといった有り様でした。そのようなわけで開催前二、三日は皆、半徹夜状態、前夜、公民館閉館時になっても展示準備半ば状態で、こうして迎えた初日は午前中展示の準備をしながら最初の客を迎えたという始末でした。中央、北部両公民館を終わった段階で五百人を越える方々に見て戴いたのですが、これらの殆どの方々と少しづつながら、話をすることができ、嬉しい限りでした。

その中で昔の調布の姿を懐かしげに語る年配の方々に比して、何よりも印象的だったのは、私たちの掲げた大きな看板やポスターに見向きもしないで通り過ぎる公民館を利用している三十代位の多くのお母さんたちの姿でした。

そこで北部公民館ではこの人達にことごと、く声をかけることにしました。するとハッとしたように殆どの人が快く見てくれるのです。

そこで解ったことは、皆あまりに忙しく心のゆとりを失っているということなのです。上村佳孝君の綿密な調査により、調布周辺に約三十種のトンボがいることが解ったのですが、これも見ようとする心の目をもつことにより、見えるものであって、私たちもぜひそのような心のゆとりを持ちたいと強く思った次第です。





武蔵野市

井上 太介君（小五）

ぼくは、どんぐり拾いに行った。お母さんと、弟の吾一と水野君がいっしょだ。

最初はとってもつまらなかった。蚊はいるし、腹が減ってうんざりだった。でも、どんぐりでクモの巣をこわしたら、とてもおもしろい。ぼくは、水野君とクモの巣こわしをして遊んだ。

しばらくして、やっとべんとうだ。べんとうを食べるために、広場へいった。広場には竹みたいにせの高い草があった。

べんとうの後、その草で剣をつくった。草の名はオオブタクサというのだそうだ。

「えい!!やあ!!とお!!とりゃ!!」

「なんの!!とお!!…くらえっ!!」

とぼくらは、む中で遊んだ。

おもしろかった。今度も来たいと思った。

遊ぶ会・企画

ドングリ キノコ 探検隊（たんけんたい）

一般の『自然観察会』よりも、もっと遊びの要素を強めて気楽に親しんでいこう、というのが今回の企画のきっかけです。もともとは水辺の自然を扱う私たちですが、湧き水を育む雑木林についても知る必要があります。

ドングリは、子供のおもちゃになるだけでなく、日本に稲作が伝わってくる前には重要な食文化でもありました。現在でも韓国では正月のお祝いにクヌギのモチをつくるそうです。

ドングリを知ることによって、その雑木林の全体の様子をある程度知ることができます。同様に、キノコが同じ木に生えることを利用して森を知ることもできます。

連休中にもかかわらず４１名が親子連れで参加してくれました。秋の柔らかな日差しの中で都立農業高校・深大寺農場を出発点に、自然広場（通称・カニ山）周辺の森の探索です。もちろん、素人の案内ですが、緑の推進委員の横山譲二先生の助っ人が心強い味方です。

ドングリ類は調布周辺で７種ぐらい見つかるはずですが、残念ながらコナラがほとんどで、しかも手入れはあまりされていませんでした。しかし、折からの長雨でキノコの方大豊作！２７種も採集できました。まだ、各所のモグラ穴より水が出て、生き生きとした森の姿も見ることができたわけです。

平成３年９月２３日

狛江市

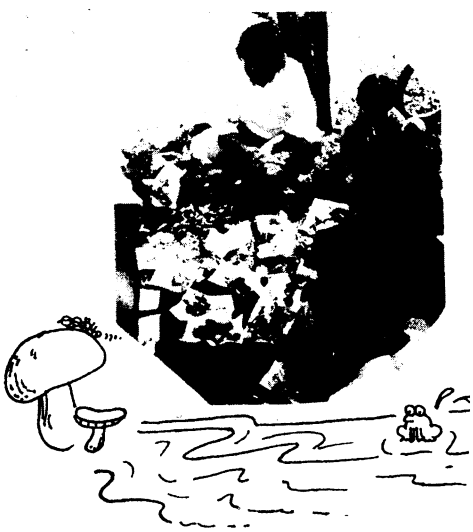
栗山 真由美さん（中二）

東京にも、まだあれだけの自然がまとまって残っていることに驚かされました。ほんの少し森を歩くだけで、あれだけのキノコが見つかるとは思ってもいなかったからです。

私のイメージでは、キノコのほとんどに毒がある、というのがありましたが、猛毒のものは少いことがわかりました。

（カニ山周辺には）湧き水もたくさん見つかり、「井戸だ!」「泉だ!」と、みんなで騒ぎました。

東京の緑の中で、たくさんの小さな自然を見つけて嬉しかったです。でも、もっとたくさんの自然を増せるといいナァと思います。



カットは栗山さん

↗今年は、コメの自由化や都市における生産緑地法の改正など、農家の人にとっても都市住民にとっても差し迫った問題を突きつけられています。いや、都市住民が問題の本質を自分の生活の将来に関わることとしてとらえているかどうかこそ大問題なのです。

話題になっているコメの自由化問題についても、単に「米が安く買えればよい」とか、ビジョンも持たずに「農業の将来は大丈夫」というような無責任な発言が目立ちます。↗

↗たしかに、大規模化・未来化の可能な平坦な土地での農地は生き残れるでしょう。しかし、私たちの原風景となる山あいの田んぼや、かつての日本人の生活が育んだ雑木林は、だれも近づけない荒涼(こうりょう)とした場所に変わる運命にあります。

そういった農地こそ森や水、多くの生き物を育み、そして、私達を育ててくれた生態系のサイクルの場なのです。いや、地球生命体の自然サイクルの一部なのです。農村の荒廃や過疎(かそ)の問題は都市の超過密と表裏一体のものとして考え、山奥の谷戸田の視点から都市農業をとらえる出発点にしたいと思います。　　(事務局　・　依田　輝男)

調布・染地田んぼクラブ

緊急発信

☞ 1／7

新聞紙上で東久留米市・落合川の改修工事が住民の合意が得られないままに見切り発車されることが発表されました。住宅地の中に奇跡的に残った湧水の流れが消えていきます。都の職員に保護（誘拐？）されたホトケドジョウの380 匹の運命はどうなるのだろう。

たった2～300m の水辺を将来のため、教育のためになぜ残せないのでしょう。

1／19

発足したばかりの西多摩環境フォーラム（久保田繁雄氏代表）が企画したネイチャーリングフェスタに会のメンバーが参加しました。あいかわらず久保田さんの説明はおもしろい。オオムラサキの幼虫を初めて見ました。それにしても、横沢入の開発がいつ始まるか心配です。

－会員募集－　野川で遊ぶ　まちづくりの会

私たちは、まだ生れたばかりの小さな会ですが、小さな生き物の視点から自然を生かした『まちづくり』を考えています。水辺や緑の身近な環境問題に関心のある方…家族で参加してみませんか‥！　　（年会費１０００円－通信費・会報作成費）

会からのお知らせ　☞ 北の杜フェスティバル ワークショップ

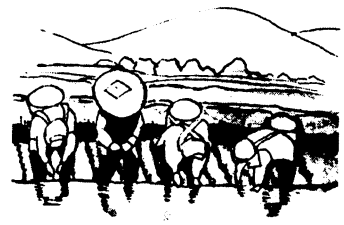
（調布・北部公民館）

３／１（日）　自然教室　…　『小さな生き物と友達になろう』

☞　魚の採り方・飼い方

チョウやトンボの見つけ方　など

都市と農地



段々畑の村からの視点

私が少年時代を過ごしたのは、ミカンの産地で有名な南予（愛媛県）です。山奥の農村地帯になりますが、山の上まで耕して天にまで至る、といった段々畑の寒村です。私にとって、農業のことを考える出発点は、この農村風景にあります。

見わたす限りに山の奥の奥まで耕作されていて、整備された道が弧線となって続き、頂上近くの雑木林まで手入れが行き届いていました。猪（いのしし）よけの鳴子（竹筒に水を受けて音を出す。いわゆる鹿オドシ）の音が、↗しじまを破って響くという光景は、四十年前の日本の原風景というべきものだったと思います。

私の記憶に間違いがなければ、この頃の農業人口は日本の人口の半数を越していたのではないかと思われます。（農家の子供を含む）昭和三十年代の高度経済成長の波に乗って、都市の吹き溜まりに吸い寄せられるように集まってきた若者たちの一人がこの私であり、無数の私たちです。そして気がついてみると、私たちの心のふるさとでもある農村が今まさに荒れなんとしているときに立ち会っています。↗

畑があるっていいナ！

我が家の周囲には、まだ畑が残っています。そして、畑の前の無人スタンドには新鮮な野菜がいつも売られています。こっちの畑では小松菜と白菜、あっちの畑ではキャベツとブロッコリー等々‥。旬の野菜が手に入ります。

２才半になる息子と、作物の成長を見るのはなかなか楽しいものです。

「リッパナ、はくさい、ダネ‥」
「コレ‥ぶろっこりナノ？」
「コレ‥ナァニ？」
と会話は尽きません。

子どもの観察眼には鋭いものがあります。じーっみつめては、「アッ、ようちゅうガイルヨ。」とか「はっぱニ、あなガアイテルヨ」などと、大人の目の高さからはとうてい見えない、小さな小さな幼虫を見つけては、その大発見に驚いています。２才の子どもには、この何でもないことが『生命』を感じさせるようです。

先日ブロッコリーを買ったら、本当に小さな幼虫がついていました。以前の私なら、そんな時、思わず目をそむけて虫を取っていたでしょう。ところが、この頃は虫付きの野菜に安心感すら湧いてきます。

小さな幼虫が安心して住処にできる野菜、蝶々や他の昆虫たちが集まってくる畑に本当の自然を感じるようになってきたのです。息子がいつも『生き物』を感じられる自然を大切にしたい、とつくづく思います。

しかし春になると、またひとつ畑が駐車場になるらしいのです。　（内藤　はるみ）

【遊ぶ会活動メモ】(平成3年9月~平成4年1月)

平成3年9月23日
「どんぐり、きのこ探検隊」(都立農業高校農場、かに山自然広場)

皆楽しげできのこの種類の豊富さに一同驚きの表情、数十年ぶりの大雨ということでかに山では至るところから湧水が流れだし、自然広場では数種のトンボが群れていた。

10月27・28日
「晩秋の上野村に遊ぶ」

十国峠は紅葉のさなか、きのこ狩り、栗拾い、物産センターでは運よくふるさと祭りの日で名産品の大安売即売会など、多様な催しがあり、超安売の野菜を大量に購入し、持ち帰った。

11月27日~12月1日
「調布周辺のチョウとトンボの写真展」(調布市中央公民館)

30種のトンボと約50種のチョウの写真を展示、小さな生き物の視点で調布の自然環境を考える環境展。

12月7日~15日

引き続き北部公民館で上記写真展、中央公民館とは出入りする人の雰囲気に違いがあり、地域に密着した公民館のよさが感じられて面白かった。

平成4年1月7日
「みぬまたんぼ保存市民連絡会訪問」(浦和市)

代表(19団体加盟)の村上氏及び秘書の方よりお話を伺う。市民と行政が協力して運動しておられる旨、たんぼの規模の大きさ、運動の広がり、ともに羨ましいぐらいで畏敬の念を抱く。

「東久留米の落合川源流を訪ねる」

今や住宅地となり、ごみも捨てられている場所から湧水が流れ出ていて、少しわびしい。80m位下の橋の上で犬の散歩をさせていた近所の主婦が湧水の場所を教えてくれたが、川の改修工事が行われることを知らなかった。しかし「川はこのままの姿であって欲しい」と語ってくれた。

【遊ぶ会・本年度やってみたいこと】

1 自然広場から用水路、谷戸田、野川にかけてを主なフィールドとする。
2 1つの柱として、生き物を視点として調査観察を行う。
3 遊び心を生かし、自在性を尊重する。
4 環境キャンプ(かに山、上野村)を行う。
5 横浜五日市、桶ケ谷沼、寄居等、学ぶべき活動をしているグループと交流会・見学を行う。
6 毎月1回例会を持つ。(第3土曜4時~6時)

(文責・依田)